

自己愛と攻撃性との関連 —情動的共感性の視点から—

心理教育実践専修 2510007

木村沙央

I. 問題と目的

現代人は自己愛的になってきているという見方がある。狩野(2007)は、「自己愛が強過ぎる場合、理想の自己イメージばかり膨らみ現実の自己とのギャップに苦しみ、さまざまな心的疾患を抱える場合が多い」と述べた。自己愛は青年期をピークに高まるとされる Gabbard(1987)は、自己愛人格特性に2つの型があることを示した。すなわち、周囲を気にかけない自己愛的な人格である「無関心型」と、周囲を過剰に気にする自己愛的な人格である「過敏型」である。自己愛的な者は自我脅威を感じやすく、しばしば攻撃性を用いる傾向にある。この時用いられる攻撃性は、無関心型と過敏型によって異なり、攻撃性が向く方向性も異なっている。

自己愛的な人物の自我脅威への敏感さは、自己愛が形作られる幼少期の母親(母親的対象)との不適切な共感的関わりの中で培われたものであり、共感性も、母親(母親的対象)との関わりの中で発達するものである。青年期における自己愛の問題とは、幼少期の養育者からの共感不全によって引き起こされるものであり、その場合は自身の共感性の発達も阻害されている。そのため、自己愛的な人格の特徴と、他者への共感とに関連が見られるのではないかと考えられる。また、自己愛に関連する他者への非共感性とは、認知的共感性の発達が阻害されたことによる情動的共感性の乏しさを示していると考えられる。

そこで本研究では、自己愛と攻撃性、情動的共感性との関連を検討する。また、情動的共感性を高めることで自己愛と関連する攻撃性が抑制されるのではないかと考え、構成的グループ・エンカウターの技法を用い、攻撃性抑制を目的としたプログラムを作成し効果検討を行う。

II. 調査研究

1. 研究1

自己愛と攻撃性との関連を情動的共感性の視点から研究していく。

(1) 仮説

仮説① 自己愛と攻撃性は情動的共感性と関連があるだろう。仮説② 自己愛人格特性である無関心型と過敏型ごとに、関連のある情動的共感性は異なるだろう。

(2) 方法

- ①対象者:A大学の大学生144名(男性23名、女性121名)。平均年齢20.14歳($SD=1.38$)。
- ②質問紙の構成:質問紙は次の3尺度構成。①自己愛人格目録(相沢, 2002)「非常によくあてはまる(5点)」～「まったくあてはまらない(1点)」の5件法50項目。②情動的共感性尺度(加藤・高木, 1998)「全くそうだと思う(7点)」～「全くちがうと思う(1点)」の7件法33項目。③日本語版 Buss-Perry 攻撃性質問紙(安藤・曾我ら, 1999)「あてはまらない(5点)」～「あてはまる(1点)」の5件法28項目。

(3) 結果

- ①因子分析

自己愛人格目録は、以下 7 因子が抽出された。「誇大感」($\alpha = .877$)、「自己愛憤怒」($\alpha = .867$)、「他者支配欲求」($\alpha = .768$)、「賞賛欲求」($\alpha = .702$)、「他者回避」($\alpha = .789$)、「他者評価への恐れ」($\alpha = .843$)、「対人過敏」($\alpha = .782$)。

情動的共感性は、以下 5 因子が抽出された。「感情的暖かさ」($\alpha = .843$)、「他者への関心」($\alpha = .762$)、「感情的冷たさ」($\alpha = .721$)、「無関心」($\alpha = .874$)、「感情的被影響性」($\alpha = .887$)。

Buss-Perry 攻撃性質問紙は、以下 5 因子が抽出された。「言語的攻撃」($\alpha = .897$)、「身体的攻撃」($\alpha = .854$)、「敵意」($\alpha = .832$)、「怒り」($\alpha = .864$)、「衝動性」($\alpha = .701$)

②相関分析:自己愛人格目録と情動的共感性では、「他者支配欲求」と「感情的冷たさ」($p < .05$)、「対人過敏」と「感情的被影響性」($p < .01$)、「誇大感」、「他者回避」と「無関心」($p < .01$)に有意な相関が見られた。情動的共感性と攻撃性では、「無関心」と「敵意」($p < .01$)、「怒り」($p < .05$)、「感情的冷たさ」($p < .05$)、「感情的被影響性」($p < .01$)と「言語的攻撃」に有意な相関が見られた。

③重回帰分析:自己愛人格目録の「無関心型」、「過敏型」と特徴とする下位因子(「無関心型」は誇大感、他者支配欲求、自己愛憤怒、賞賛欲求、「過敏型」は対人過敏、他者回避、他者評価への恐れ)の尺度得点の平均と標準偏差をもとに、「無関心型」($n=55$)と「過敏型」($n=89$)に分類した。重回帰分析の結果を表 1 に示す。

表 1 無関心型の重回帰分析結果

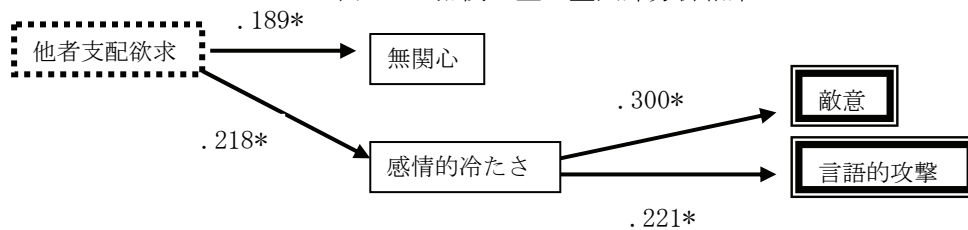
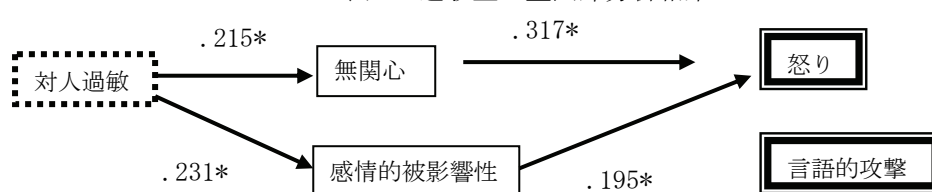


表 2 過敏型の重回帰分析結果



2. 研究 2

自己愛人格特性によって言語的な攻撃性がどのように表現されるのかについて、P-F スタディを用いて検討する。

(1) 仮説

①無関心型は過敏型よりも外罰傾向が高いだろう。②過敏型は無関心型よりも内罰傾向が高いだろう。

(2) 方法

①調査対象者:東北地方にある A 大学の学生 16 名。

②方法:研究の目的に同意した者に P-F スタディを実施。テスト中、調査者は調査協力者から少し離れた位置で待機した。

(3) 結果

P-F スタディの評点に信頼性を持たせるため、P-F スタディ評点の経験のある大学院生 2 名と、心理学専攻の教員 1 名、調査者の計 4 名とで P-F スタディの評点を行い、一致率を

調べた。一致率は8割。

①相関分析:無関心型、過敏型ごとにP-Fスタディ評点の平均値を用いて相関分析を行った。無関心型は、自我防衛と外罰、要求固執と外罰、内罰、自我防衛の間に正の相関がみられた($p < .05$)。過敏型は内罰と無罰、障害優位と無罰、自我防衛と内罰、要求固執と内罰、自我防衛に正の相関がみられた($p < .05$)。障害有意と内罰には負の相関があり($p < .05$)、要求固執と外罰には有意傾向がみられた($p < .01$)。

② t 検定: t 検定の結果である。攻撃性の方向である「他罰」において、「無関心型」が「過敏型」よりも有意に高かった($t(15)=3.83, p < .01$)。また、攻撃性の様相である「自我防衛」において、「無関心型」が「過敏型」より有意に高かった($t(15)=2.65, p < .01$)。

③形式分析:無関心型の欲求不満場面における攻撃性の特徴として、①自分自身の過失を素直に認めない ②他者に対して言い訳せず、他者をかばわない ③欲求不満に対する耐性が低いことが示された。過敏型の欲求不満場面における攻撃性の特徴として、①他者からの非の指摘を受け入れず、欲求不満の原因を他者だと考え、問題解決を依存する ②他者からの非の指摘を受け入れ、欲求不満の原因は自分自身だと考え、自分で問題解決を行うことが示された。

III. 介入研究

1. 目的

他者への情動的共感性の冷たさ、感情的被影響性、無関心に働きかけることで、攻撃性を抑制する為の治療プログラムを作成、実施することを目的とする。

2. 仮説

①構成的グループ・エンカウンター実施前より実施後に、情動的共感性の感情的冷たさ、感情的被影響性、無関心の尺度得点は減少するであろう。②構成的グループ・エンカウンター実施前より実施後に、言語的攻撃性、敵意、怒りの尺度得点は減少するであろう。

3. 方法

①A大学の学生15名(男性2名、女性13名)。調査協力者の平均年齢は29.84(SD=11.63)。②調査協力者を無関心型治療プログラムを実施する2群、過敏型治療プログラムを実施する2群の計4群に分類し、各プログラムを実施した。プログラム実施にあたり、調査協力者に、自己愛人格目録、情動的共感性尺度、Buss-Perry 攻撃性質問紙への回答(プログラム実施前後に1度ずつ質問紙調査を実施)と、発話の録音への協力を依頼し、同意を得た者のみ実施した。プログラムの実施後、プログラムの体験を通して感じたことなどを振り返り用紙に記入するよう依頼した。

4. 結果

(1)プログラム実施に関する効果の検討

①プログラム実施前後における自己愛、情動的共感性、攻撃性の比較(t 検定)

無関心型治療プログラム:自己愛では「他者支配欲求」、「対人過敏」($t(6)=3.84, p < .01$: $t(6)=3.26, p < .01$)、情動的共感性では「感情的冷たさ」、「無関心」($t(6)=3.15, p < .05$: $t(6)=3.97, p < .05$)、攻撃性では「言語的攻撃性」、「敵意」($t(6)=3.86, p < .01$: $t(6)=3.02, p < .01$)においてプログラム実施後、尺度得点が有意に低いという結果が示された。

過敏型治療プログラム:自己愛では「対人過敏」($t(7)=3.21, p < .05$)、「他者回避」($t(7)=3.59, p < .01$)、情動的共感性では「感情的被影響性」($t(7)=3.93, p < .05$)、「無関心」($t(7)=3.64, p < .01$)、攻撃性では「怒り」($t(7)=3.89, p < .01$)においてプログラム実施後、尺度得点が有意に低いという結果が示された。以上の結果より、仮説①、

②は支持された。

②プログラム実施における質的検討(プログラム実施中の発話、振り返り用紙の記載)

プログラム参加者の発話をKJ法を用い分類し、「自己発見」、「他者発見」、「他者との繋がり」、「感じたこと」と命名した。「自己発見」は、さらに自己分析や自己肯定感に分類され、「他者発見」も自己と他者の差異に関する発見や、者との関わりによる自己の変化に分類された。

IV. 考察

無関心型は、現実感を伴わない脆弱な自己評価を維持する為、自己評価の低下に繋がりうる自分自身の非の認識を回避する。しかし、自己評価の安定性を他者に依存していることや、他者に対し強引に問題解決を求めることで、対人関係が悪化し自己評価維持の脅威に直面する。そうした場合、無関心型は他者に怒りを感じ、報復的な攻撃をすることがある。精神発達が良好でない場合、弁護能力は低くなるため、この傾向は強まることが推測される。適応状態が良好な場合、思い通りにならない他者への怒りは抑圧されたり、他者へのほどよい主張性として機能するのではないかと考えられる。過敏型は、他者からの指摘を受け入れ、自分自身の責任だと感じる。他者に援助を求めない傾向は、自己を防衛する為の手段だと捉える事もでき、過剰な場合はひきこもり症状を呈するのではないかと考えられる。しかし、他者からの指摘を受け、自分自身で問題解決を行うのは、建設的な方法でもある。すなわち、この人格特徴は謙虚さと捉える事もでき、基本的な人間関係においては比較的良好ではないかと考えられる。

無関心型、過敏型に共通して、記述内容に複雑さが見られなかった。岡田(2005)は、現代青年の多くが回避か攻撃といった、極端に2極化した反応を示しやすいと述べている。現代青年における、複雑な言語反応の無さは単純で2極化した心理特徴を示しているのではないか。こうした傾向が、現代人が自己愛的になっていると指摘される要因になっているのではないか。攻撃性の抑制を目的とした治療プログラムを作成し、効果の検討を行った。プログラム実施により、他者に対する支配的な態度や無関心さが低減し、怒りや敵意、言語的な攻撃が抑制されることが明らかとなった。しかし、治療的プログラムが自己愛や情動敵共感性、攻撃性の全ての因子に影響しているとは言い切れず、プログラムの再検討が必要であろう。このプログラムを経験することで、未熟だった共感性の発達が促進され、「回避と攻撃」という問題への対処方略が、より複雑性を帯び、他の対処法を獲得することが出来るようになるのではないかと考えられる。

V. 今後の課題

攻撃性をより無意識的な水準から調査する為にP-Fスタディを用いたが、実施するテスト内容を検討する必要がある。また、治療的プログラムに関し、プログラム参加者の人数増加と統制、さらにプログラム内容について検討するべきであろう。

VI. 引用文献

Gabbard, G. O. 1987 Two subtypes of narcissistic personality disorder. Bulletin of Menninger Clinic, 53, 527-532.

Kohut, H. 1971 The Analysis of the self. New York: international Universities Press. (本城秀次訳 笠原 監訳 1994 自己の分析 みすず書房)

岡田尊司 2005 誇大自己症候群 ちくま書房

狩野力八郎 2007 自己愛パーソナリティ障害のことがよくわかる本 講談社

